

最近の温かさで今年は既に土手沿いのツツジが満開になりました。画像をホームページに載せましたので是非ご覧ください。

先月の初め広島県の真宗学寮で講師に松尾宣昭和尚をお迎えし「ご信心をいただく」という講題で勉強会があり出席させていただきました。広島県は、安芸門徒と呼ばれる熱心なお同行の多い場所で当日会場もいたるところでお念仏の音が響く中、あたたかい雰囲気で行われました。

講義の中で親鸞聖人がお聖教の中で「たのむ」という言葉に「憑^{たのむ}」という漢字が使われることの重要性をご説明される結論として「阿弥陀様は私たちにぴったりくっついてくださっている」ということを言われました。和上独特の表現でしたが、私にはとてもあたたかく有難い話でありました。

詳しくその内容をご説明いたしますと、一般的に私たちが「たのむ」という漢字を書く場合「依む」という文字を使います。この文字は「依頼する」という時などに使う文字ですが「いらする」という言葉の意

味を考えてみるとわかりますようにその言葉には相手が引き受けてくれるかまだはっきりしないときの状態を意味する言葉でもあります。その心には期待と不安が混ざっているとも言えます。しかし一方の「憑」の文字の「たのむ」とは、まったくの不安なくぴったりとまかせている状況のことをいう文字だそうです。

「皆さんもあらゆるお祭りに行った記憶があると思いますが、祭りが終わるころ小さな子供が親に背負われ、だら～とびったりくっつき疲れ切った様子で家に帰っていく光景を思い出してください。なぜあんなにだら～とびったりくっついていれるか、その子は親の背中に何の不安もなく安心してすべてまかせる心があるから、だら～とびったりくっつき寝れるんです。」と言われました。

親鸞聖人が「たのむ」の言葉に「憑」の文字が使われるのは阿弥陀様と私の距離はまったく隙間もなくぴったりくっつき一緒に生きてくださっていることを顕すために使われるのです。と和上がお話しくださいました。そして、阿弥陀様は

「すべてまかせよ」と南無阿弥陀仏の言葉となり告げてくださっておりますので祭りの帰り子供が親の背中にすべてまかせてだら～と眠って帰るように、私たちの生死の問題は南無阿弥陀仏とすべておまかせしお浄土に帰らせていただく(往生即成仏)だけであります。お浄土に生まれさせていただきますと、そこが本当の安らかな平等の世界であり今度は阿弥陀様と一緒に苦悩のいのちを自由自在に救っていける時間と空間を超えた世界です。

死んでいくことの意味が分からずそのことからただ目をそらすだけの生き方しかできなかつたものに、生まれてきたことの意味と、死んでゆくことがむなししいということに決してさせない「すべてまかせよ」といつでもどこでも南無阿弥陀仏と呼んでくださっております。

阿弥陀様を本当の親様と仰がせていただくのはいつでもどこでも悲しみのいのちに、広大な慈しみの背中をさしだしてくださっているからです。その背中にすべてをまかせるのみです。

南無阿弥陀仏